

通常総会で「法人化」へ

佐賀県唐津市とフランスが連携して化粧品の大産業集積地を同市につくるべく、2013年に設立されたジャパン・コスメティックセンタ―(JCC)は、3月27日に市内ホテルで「2014年度第2回通常総会」を開催した。

総会には会員企業、団体に、JCCと目的を同じくする新法人を別途設立するといふもので、2015年度事業計画につ

安心安全の徹底で差別化・
アルビオン 高付加価値化へ

また、JCCは総会開 対し「古いモノも本物で 催にあわせて記念講演を あるから素晴らしい。私

まず、第一号議案の「2015年度事業計画について」は、2015年度のフランスコスメティック・バレーとのビジネス交流事業やアジア市場への進出、開拓事業に關して具体的な計画を示した師に招いた。

開催した。今回の記念講演では、アルビオンから染谷高士取締役カスタマーサービス本部副本部長と、ポーラから砂金美和商品企画部B・Aブランドマネージャー課長を講師に招いた。

が掲げる『世界に誇れる佐賀県づくり』とは今まで綿々と佐賀の皆さんが培ってきたものを大切にすることとあわせ、『本物を探す』という意味でもある。コスメも本物を追求していくという気概

ほか、唐津市や玄海町一帯の植物、葉草などの地域資源の調査研究、活用に関して工程を示した。

（よしのり）知事が登壇「アルビオンの独創的な講演に先立ち、佐賀県が大切だ」と激励したから1月に県知事に就任したばかりの山口祥義アルビオンの染合氏が講演会の第一部では、

第二号議案の「2015年度収支予算について」は、会費は2014年度と変わらないが、会員の増加による行政からの負担金収入が増えたため、収入は約1507万円を見込むとした。

山口知事は、前職で秋田県の地域振興に取り組んでいた際にアルビオン社の染谷氏と面識があったといい、再会を喜ぶと同時に「コスメを通じて地域振興のお手伝いをしてほしい」と挨拶した。

同社は高級化粧品の中でも「一人者として知られるが、染谷氏は『私たちの言う高級化粧品とは』『価格の面での高級』だけで



山口祥義 佐賀県知事

様のご要望に応えるという意味もある。その根幹は独創的な商品、他では手に入らない、味わえないことが重要で、当社の開

を2名から3名に増員し、総会の実施頻度は、通常総会を継承する形となった決算総会(年一回)のみに変更する。

このほか、第四号、第五号議案としてそれぞれ「現行JCCの解散」「残余財産の処分」が議案として提出され、第一、第五号議案まで賛成多数ですべて可決された。

発部門ではこのことを『ごだわりのモノづくり』と表現している」と前置きした。技術面では、研究や理論といった「左脳

型」によるものとビジュアルや感覚、イメージなど「右脳型」による価値

がある。染谷氏は、化粧品には肌に対する効果と商品を使う喜びを同時に実現しなければ価値は生

ポーラ 共感

成へのシフト」と題し、B・Aシリーズの開発か



価値ある素材の発掘と

ポラ
共感性の付与が重要

第2部では、ポーラの砂金氏が「ポーラB.A シリーズから学ぶ製品開発からブランド開発・育成へのシフト」と題し、

B
A
シリ
ース
の
開
発
か

アルビオンの染谷高士氏

誰が栽培しているのか、どういう経路で納品されているのかというトレースビリティがわかりづらい。その部分を透明化することで、差別化し、高付加価値化へと導くことが大切だ」(染谷氏)

例えば同社は自活に取り組む医薬基盤研究所兼植物資源研究所(北海道名寄市)が品種改良して、肌荒れを抑えるヨクイニンの含有量を増やすなど高付加価値化したハトムギ「北のはと」を使っている。

産学産連携による成分開発では、昨年10月にリニユールした「エクシア モイスチャールライン」や「スリランカにアルビオンと東京農業大学産学連携研究所」「スリランカ伝統植物研究所」を開所した。今年4月から本格的研究が始まるという。

「今、日本の化粧品は海外からも注目され、特に中国からものすごい数の観光客が押し寄せて化

増による安心・安全のため、白神研究所（田県藤里町）で栽培しているヨモギを使っ
たを開発しており、
から抽出された成分
ズカは王子ホールディン
グでは今年4月に発売予定の化粧品を買いこむ。効果
だけではなく安心・安全
面からも評価をいただきたい
結果ではないか。
日本の化粧品は技術に関

イクニス、ネイチャーズ」に配合される。また、現在の「ス」に配合されている。また、北海道医療大学とともに成分研究を行っている。化粧品の素材化に成功した。

行い、国産の藁草復元活動は国内に
海外市場などに展開
を上げたため認知度
に拡大していると
成功している。
また、このほかマスク
だ（砂金氏）として、
在までに単品使いではな
くライン使用者の育成に
は話す。地方に行けばい
くほど店がなく、今後は
「店舗の見える化が必要

「Aが重要視している」を泡状にして肌に入れ込むというユニークなアイディアを打ち出し、既にある概念でも見せ方を変え、ることによって新たな価値が生まれることを説く。砂金氏はJCCの活動について「本」に価値の

技術が確立されてきた。若年層のアンチエイジングに関しては、ストリークを変えれば価値が違ふように見えてくることを、「B・A・R いモノ」にとどまることE.D.」を事例に挙げて説く、地域ながらのスト

2010年にはライブを拡充し、複合施設を使うことにより効果が高まるという「パエクト・シナジー効果」を訴求した結果、現行の「見える化」に成功しているが、一方で「どこで買えるのがわからない」のが課題と砂金氏講演を締めくくった。

とどまらず海外でも展開
予定で、2013年10月
にはスリランカにアルビ
オンと東京農業大学産学
連携研究所「スリランカ

「今、日本の化粧品は海外からも注目され、特に中国からものすごい数に研究が始まるという。伝統植物研究所」を開所した。今年4月から本格

の観光客が押し寄せて化粧品を買いにくる。効果だけではなく安心・安全面からも評価をいただいている結果ではないか。

日本の化粧品は技術に関

しては一流なので、そうしたものを付加価値にすることで、日本の成長戦略の中に化粧品産業が加わればいいなと思っている。その意味でJCCの

活動は大変有意義だ」(染谷氏)

.....

は話す。地方に行けばいくほど店がなく、今後は「店舗の見える化が必要

だ」（砂金氏）として、
訪販型から誘客型まで対
応できるビジネスモデル
の構築を進めていく考え
を明らかにした。

について「本当に価値のある素材の探究、開発、発掘をベースにしつつ、価値化することに取り組んでいる。その中で『インモノ』にとちまの『モノ』

なく、地域ながらのストリー性、共感性を付与することで日本だけでなく世界に対して大きな価値を示すことができるのではないかと評価し、

講演を締めくくった。